

所信表明

二〇二六年度中央常任副委員長選挙所信表明

中央常任副委員長区分の立候補者は四名です（定数若干名）

中央常任副委員長候補①

経済学部 三回生

小泉 春翔（こいづみ はると）

【全ての学生が主役となる学友会を目指して】

この度、二〇二六年度 立命館大学学友会 中央常任副委員長選挙に立候補いたしました、経済学部三回生の小泉春翔（こいづみはると）と申します。

現在は協定派遣プログラムに参加し、英国のイーストアングリア大学・経済学部にて一セメスター間の交換留学を行っています。

本所信表明では、私が本役職への立候補を決めた理由、私がどのような力を持つた人間だと考えるか、学友会や中央パートに対する私の現状認識と提言、私が本役職へ選出されることで期待される効果の四点について、先に掲げたテーマと関連させながら述べて参ります。

まず初めに、私が今般の選挙に立候補した率直な理由は、学生生活最後の一年間を中央常任委員会の一員として過ごし、学友会の全体的な舵取りに関わる総合政策の立

案、実施に貢献したいと考えたためです。私は入学と共に中央パートでの活動を開始して以来、今日までの二年半にわたって中央事務局特別事業部、同グローバル化推進室、経済学部自治会に所属し、新歓・学園祭運動や学友会における非日本語話者の支援、経済学部生と大学側との橋渡しといった役割を経験してきました。所属部署の三役といった要職を担うことこそありませんでしたが、中央パートの一員として学友会の意義やその活動の重みを噛み締めながらここまで進んできました。

私はこれらの経験から、また今回の留学によって立命館大学を外側から見つめる立場に身を置いたことから、学友会が大きなポテンシャルを持つ組織だということに気が付きました。そのポテンシャルとは、まさに学友会員一人ひとりが持つ声と力に他なりません。本学の学友会には学部、回生、国籍を問わず様々なバックグラウンドを持った学生が集まっており、それぞれが自身の得意なこと、好きなことを大切にしながら日々の大学生活を送っています。私はこうした小さな力を集め合わせることで学友会の持つポテンシャルを最大限に引き出し、立命館大学をより良い大学に変えて行きたい、学生一人ひとりが主役となれるような学校にしたい、そうした想いを強く抱いています。その理想の実現へと直結する学友会の総合的な運営に携わりたく、常任副委員長の役職へ名乗りを上げた次第です。

次に、私の持っている力について述べたいと思います。私は、自身が常任副委員長という重職を担うに相応しい計画力や行動力を身に付けていると自負しています。例として、私がグローバル化推進室員として本年の六月に取り組んだ全学行事英訳研修

を挙げたいと思います。当時の私は（現在も変わらず）、新歓や学園祭という巨額の公費を投入するイベントだからこそ、非日本語話者の学友会員や来場者への配慮も一層欠かせないという問題意識を抱いていました。そこで祭典企画の実施や広報にあたって日英の二言語化をさらに進めるべく、運営の主体となる特別事業部員向けの研修を企画しました。他の動機としては、私自身も特別事業部の財務課に所属しており、折に触れて学友会費一円が持つ重みを感じる機会があったことも大きかったように思います。資料の作成過程では関係者の方々と何度も調整を重ねながら、グローバル化推進室員としての理想と実務面での現実的な着地点を探る試みを続けました。その結果、研修後のアンケートでは九割近くの特別事業部員から有意義な内容だったとのフィードバックを貰い、今年度の学園祭において実際に主体的な二言語化に取り組む企画が出るなどその効果を実感しております。

このエピソードが示すように、私は一度やると決めたことを最後までやり遂げられる人間です。例え初めの想定と異なることが起こったとしても、それらに柔軟に対処しより多くの人に自身の考えが伝わるよう、あるいは全体としてより良い結論が導かれれるよう試行錯誤出来る力があります。私はそうして積み上げてきたこれまでの活動に搖るぎない自信を持っていますし、それが単に主観的な自己評価でないことは私の推薦者の方々が証明して下さるものと信じています。さらに、それが決して中央パートにおける活動にのみ限つたものでないことは、例えば私が正課において西園寺記念奨学金を一度も欠かさず受給し続けていることからもお分かり頂けるかと思います。

続いて、学友会や中央パートについての私の現状認識と掲げる施策案についてご説明申し上げます。本役職の役割はあくまでも常任委員長の補佐ですが、それを越権しない範囲で私自身の提言についても考えて行きたいとの思いからここに記す次第です。

本学の学友会は、日本最大級の学生自治組織として過去数十年にわたる先輩方の手により脈々と受け継がれてきました。その根幹を成すのが、全学生を学友会員とする全構成員自治の原則です。しかし実際には、学生一人ひとりの学友会への帰属意識は希薄なものであると言わざるを得ず、それにより中枢機関たる中央パートにおける人材不足が経年的な課題として定着してしまっている現状は、過年度の役員候補者が所信表明にて言及した通りです。私はこの課題に正面から取り組み全ての学生に開かれた学友会を目指すため、自身が携わって来た自治会活動と全学行事の二つの視点に留学先での実体験を掛け合わせ、そのあり方を模索したいと考えています。

一点目に、新しい学園共創活動の可能性として、現在各学部の自治会が行っている五者懇談会の企画や運営を自治会員でない学生にも担つて頂くというのはどうでしょうか。例えば毎年各学部生から一定数の学生を無作為に抽出し、選ばれた学生が自治会と協働しながら、課題の議論や学部生の意見の収集、大学側との協議を主導するといった具合です。これは自治会側にとつてもかなりの労力を要する試みになりますから、まずは希望する一部の学部自治会において試験的に導入し、課題や効果を検証した上で全学的な議論へと発展させることができます。こうした方策によって中央パート外の学友会員を積極的にその意思決定や運営に巻き込むことで、より

広範かつ多様な観点から理想的な大学づくりへ資する議論が生じる可能性が高まるとともに、学生に対し中央パートの活動をより具体的に可視化することへ繋がるのではないでしょうか。また、こうした取り組みを経年的に行うことで自治会自身がそのあり方や活動意義を振り返る契機となり、より一層の活発化が期待されます。

二点目は、新歓運動における中央パートの関与強化と機能向上についてです。毎年四月には各キャンパスでウエルカムフェスティバルが開催され、新入生歓迎企画と中央パートや課外自主活動団体による集中的な勧誘活動が行われます。しかし、そこで発信した各団体の概要が実際に新入生の獲得へ結び付くためには、新入生が自らより詳細な情報を入手する必要があります。そこで、学友会所属団体によるあらゆる説明会や体験会の日時、場所、内容といった情報を集約し、一元的に発信する仕組みを構築してはいかがでしょうか。これにより、新入生が自身の関心やスケジュール、キャンパスに合わせて団体の情報を取得し、各イベントの予約までを一体的に行える環境を整備します。課外自主活動は学生生活を彩る重要な要素であり、学友会活動の柱の一つです。その間口を明瞭かつ簡潔にすることで、その活動がより活発になるだけではなく、学友会や中央パートがどのような組織であるかを直感的に伝えることが可能になるとを考えます。これは、秋新歓への応用や非公式の勧誘活動に伴うトラブルを未然に防ぐ観点からも有用な方法だと期待されます。

ここに掲げた一連の施策は、あくまで私の提案の域を脱しないことを重ねて強調し申し上げます。またこうした取り組みをそつくりそのまま取り入れることを主張している訳でもございません。中央パートの各団体による現状の活動に支障をきたさぬよ

う、丁寧な試行が不可欠であることは言うまでもなく重要なことです。しかし学友会における当事者意識の低下、全構成員自治の原則の形骸化という本質的な問題を解決し、文字通り全ての学生が主役となる学友会を目指すためには、今こそこのような思い切った議論が求められているのではないかと考える次第です。

最後に、私が本役職へ選ばれることによつて期待されることについてお伝え申し上げます。それは私が常任委員長の良き理解者となり、その補佐役としてより良い意思決定へと導くことが出来るという点です。学友会や中央パートのあり方に完全な正解、ゴールはありません。現状に満足せず組織を引き続き発展させて行くためには、堀新常任委員長が所信表明で述べたように不斷の努力による伝統の継承と弛まぬ変革への姿勢が不可欠です。しかし一人で全てを考え行動していくは、必ずその中に思考の偏りや見落としが生じます。それはさらに言えば、中央パートの構成員だけが学友会の今後を真剣に考えていても決して十分とは言い切れないということです。

私がこれまでの活動で培つた経験や、留学を通して得た学生自治のあり方に関する知見といった幅広い視点を活かしながら常任委員長を補佐することで、中央常任委員会がより良い学友会を目指す変革の旗振り役となるよう貢献出来ると考えています。そうすることで、私が思い描くような学生一人ひとりの個性が光る学友会を少しづつ創り上げて行きたいです。

これらのことから、私は自身が中央常任副委員長の重職を引き受けるに恥じないだ

けの人間であると考え本役職に立候補した次第です。実際に選出された際には、いよいよ書いた理想の下堀新常任委員長をしっかりと支え、他の常任役員とも連携しながらより良い学友会づくりのため全力で取り組んで参る所存です。また本所信表明の内容に偽り無きことを、重ねてお誓い申し上げます。

私は、立命館大学学友会が学生一人ひとりを成長させるきっかけに溢れた素晴らしい場所だと考えております。知識や経験が無くことは、決してマイナスを意味するものではありません。「挑戦を最後まで諦めなさい」、そして「自分が『こうしたい』と思うものを貫く」と、誰もが次のステージへと駆け上がるチャンスを掴み取ることが出来る信じています。私はそのような全ての学生が互いに認められ、受け入れられる環境を必ずや作って参ります。

結びに代えまして、日頃より私の中央パート、及び学内での諸活動を支えて頂いている全ての皆様に心からのお礼と感謝を申し上げ、私の所信表明といたします。ありがとうございました。

[Aiming for a Student Union Where Every Student Plays a Leading Role]

My name is Haruto KOIZUMI, a third-year student in the College of Economics, and I am running for the position of vice-chairman of the Central Standing Committee in the 2026 Ritsumeikan University Student Union election.

I am currently participating in an exchange program and studying abroad for one semester at the School of Economics at the University of East Anglia in the UK.

In this policy statement, I will discuss four main points related to the theme mentioned above: the reason I decided to run for this position, the strengths I believe I possess, my current understanding and proposals regarding the Student Union and the Central Part, and the expected positive effects of my election to this office.

First, my reason for running in this election is my desire to spend my final year of student life as a member of the Central Standing Committee, contributing to the planning and implementation of comprehensive policies for steering the Student Union. Since entering the university and beginning my activities in the Central Part, I have spent the past two and a half years belonging to the University-wide Events Department of the Central Secretariat Office, the Globalization Promotion Office, and the Student Council of the College of Economics. Through these roles, I have experienced welcome events, university festivals, supporting non-Japanese-speaking Student Union members, and bridging the gap between students in the College of Economics and the university administration. Although I did not hold one of the top three executive positions in these departments, I have advanced to this point while intensely appreciating the significance of the Student Union and the weight of its activities as a member of the Central Part.

Through these experiences, and by placing myself in a position to view Ritsumeikan University from the outside during my study abroad, I realized that the Student Union is an organization with immense potential. This potential is nothing other than the voice and power possessed by each Student Union member. Our Student Union gathers students with various backgrounds regardless of college, year, or nationality, each cherishing their own strengths and interests in their daily university lives. I strongly desire to maximize this potential by gathering these small powers to change Ritsumeikan University into a better university - a school where every student can play a leading role. Wishing to be involved in the comprehensive management of the Student Union, directly aligned with this ideal, I have announced my candidacy for the position of vice-chairman of the Central Standing Committee.

Next, I would like to discuss my strengths. I pride myself on possessing the planning and execution abilities appropriate for the heavy responsibility of vice-chairman of the Central Standing Committee. As an example, I would like to mention the English translation training for university-wide events that I worked on in June of this year as a member of the Globalization Promotion Office. At that time (and still now), I was aware that consideration for non-Japanese-speaking Student Union members and visitors is essential, precisely because welcome events and university festivals involve substantial public funds. Therefore, to further advance bilingualism

(Japanese/English) in the implementation and publicity of festival events, I planned training for members of the University-wide Events Department, who are the leading operators. Another motivation was that I belonged to the finance section of the University-wide Events Department and frequently felt the weight of every yen of the Student Union membership fee. During the document creation process, I repeatedly adjusted with relevant parties, seeking a realistic landing point between ideals and practical realities as a member of the Globalization Promotion Office. As a result, in the post-training survey, nearly 90% of the University-wide Events Department members reported that the content was meaningful, and I observed this in events actively engaging with bilingualism at this year's university festivals.

As this episode shows, I am a person who accomplishes what I decide to do until the end. Even if things differ from initial assumptions, I can adapt flexibly and use trial and error to share my thoughts with more people or reach a better overall conclusion. I have unshakable confidence in the activities I have built up so far, and my recommenders can attest that this is not merely a subjective self-evaluation. Furthermore, this is not limited to activities in the Central Part, as I have consistently received the Saionji Memorial Scholarship as part of my regular curriculum.

Following this, I will explain my current understanding of the Student Union and the Central Part, as well as the policy measures I propose. Although the role of this position

is strictly to assist the chairman of the Central Standing Committee, I write this with the intention of thinking about my own proposals within a range that does not exceed my authority.

Our Student Union has been passed down continuously as one of Japan's largest student self-governance organizations by seniors over several decades. Its foundation is the principle of the autonomy of all students, which makes all students members of the Student Union. However, in reality, I must say that individual students' sense of belonging to the Student Union is weak, and the resulting shortage of human resources in the Central Part, the central organ, has become a chronic issue, as mentioned in the policy statements of past officer candidates. To tackle this issue head-on and aim for a Student Union open to all students, I want to explore the way forward by combining the two perspectives of student council activities and university-wide events I have been involved in with my real experiences from studying abroad.

First, regarding the possibility of new college co-creation activities, how about having students who are not student council members take on planning and operations for the five-party conference currently conducted by each college's student council? For example, a certain number of students could be randomly selected from each college every year, and these selected students, in collaboration with the student council, could lead discussions on issues, collect student opinions, and consult with the university. Since this attempt requires considerable effort from the student council side as well, it

is desirable to introduce it on a trial basis in some willing college student councils first, verify the issues and effects, and then develop it into a university-wide discussion. By actively involving Student Union members outside the Central Part in decision-making and operations through such measures, the likelihood that discussions contribute to creating an ideal university from broader, more diverse perspectives increases. Furthermore, it would enable students to visualize the activities of the Central Part. Also, by conducting such initiatives over time, the student council would have the opportunity to reflect on its nature and the significance of its activities, thereby further revitalizing itself.

The second point concerns strengthening the Central Part's involvement and improving its function at welcome events. Every April, welcome festivals are held at each campus, with concentrated recruitment activities by freshman welcome events, the Central Part, and extracurricular voluntary activity organizations. However, the overview of each organization disseminated there should actually lead to the recruitment of freshmen who need more detailed information. Therefore, how about constructing a system to aggregate and centrally disseminate information, such as the date, time, place, and content, of all briefing and trial sessions conducted by Student Union-affiliated organizations? This would create an environment where a freshman can obtain information on organizations according to their interests, schedule, and campus, and make reservations for each event in an integrated manner. Extracurricular

voluntary activity is an essential element of student life and one of the Student Union's pillars. By making the entry point clear and straightforward, it will not only make activities more engaging but also make it possible to convey intuitively what kind of organization the Student Union and the Central Part are. This is expected to be a practical method for autumn welcome events and for preventing troubles associated with unofficial recruitment activities.

I emphasize again that the series of measures listed here does not go beyond the scope of my proposals. Nor am I insisting on adopting these initiatives exactly as they are. It goes without saying that careful planning is essential to avoid hindering the current activities of each organization in the Central Part. However, to solve the vital problems of the decline in a sense of ownership in the Student Union and the hollowing out of the principle of autonomy of all students, and to aim for a Student Union where literally all students play a leading role, I believe that such bold discussions are required now.

Finally, I will outline what is expected of me in this position. I want to become a good partner in understanding with the chairman of the Central Standing Committee and to guide him toward better decision-making as his assistant. There is no perfect answer or goal for the Student Union or the Central Part. To continue developing the organization without being satisfied with the status quo, an attitude of inheriting tradition through ceaseless effort and tireless reform is essential, as the new chairman

of the Central Standing Committee, Mr. Hori, stated in his policy statement. However, if one person thinks and acts on everything alone, biases in thinking and oversights will inevitably occur. Furthermore, it is not enough for only the members of the Central Part to seriously think about the future of the Student Union.

By utilizing the broad perspectives I have cultivated through my activities so far and the knowledge of students' self-governance gained from studying abroad, I believe I can assist the chairman of the Central Standing Committee in making the Central Standing Committee a flag-bearer for reform, aiming for a better Student Union. In doing so, I want to gradually build the Student Union where every student's individuality shines, as I envision.

For these reasons, I am a person worthy of the heavy responsibility of serving as vice-chairman of the Central Standing Committee and have decided to run for this position. If actually elected, I intend to support the new chairman of the Central Standing Committee, Mr. Hori, in accordance with the ideals set forth here, and work with all my might to create a better Student Union in cooperation with the other executive officers. I also pledge again that there is no falsehood in the content of this policy statement.

I believe that the Ritsumeikan University Student Union is a wonderful place full of opportunities for every student to grow. Lack of knowledge or experience is not

necessarily harmful. I believe that anyone can seize the chance to run up to the next stage by „ never giving up on challenges until the end „ and „ sticking to what one thinks they want to do. „ I will create an environment in which all such students are recognized and accepted.

In conclusion, I express my heartfelt gratitude and thanks to everyone who supports my activities in the Central Part and within the university daily. This concludes my policy statement. Thank you very much.

次のページより11人目の候補者による所信表明を掲載します。
併せて、確認ください。

中央常任副委員長候補②

生命科学部 三回生

吉田 淑乃（よしだ みおの）

この度、二〇二六年度中央常任副委員長に立候補いたしました、生命科学部三回生の吉田淑乃と申します。本所信表明では、立候補に至った経緯と、来年度の中央常任副委員長としての活動の方向性について述べさせていただきます。

【これまでの経験】

・生命科学部自治会

一回生から執行委員として活動に参画し、二回生では委員長を務めました。活動が停滞していた当時の生命科学部自治会に対し、私は五者懇談会等の必要不可欠な活動を確実に実施することで組織を立て直しました。また、最終的に意見交換会や履修相談会の実施、規約の整備なども実現しました。さらに、活動の目的や施策を他執行委員と共有し、次世代が一年目から深く関われる環境を整備しました。その結果、翌年度以降も自立して活動できる「持続可能な団体」へと変革することができました。この経験を通じ、個人の資質に依存する組織ではなく、「仕組み」によって支えられる組織こそが真に強固であると確信いたしました。

・全学自治会

二回生から執行委員、今年度は会計部長として、各学部自治会の支援や課題解決に

携わっています。全学自治会という外部の立場から各学部自治会を支援する中で、どの学部自治会にも共通して「活動の継続性」や「引き継ぎの難しさ」という課題があることを実感しました。これらの課題には、約四年で執行委員が入れ替わることが根源にあると考えます。そのため、人的資源に依存せず、人の入れ替わりに対応できる仕組み作りがこれらの課題の解決に繋がると考えます。学友会の発展には自治会に限らず他のパートにおいても、継続して活動できる環境の整備が必要不可欠であると考えております。

・中央常任委員長補佐

今年度は中央常任委員長補佐として、中央常任委員長のみに限らず他の常任役員の方々全体のサポートも行つてきました。中央委員会の会議運営補助等の実務経験が、中央常任委員会に貢献し中央パート全体を巻き込んだ活動に活かせると自負しております。

【方向性】

私が中央常任副委員長として目指すのは、「中央パートの活動の基盤の強化」です。

一過性の活動ではなく未来へ続く組織を作るため、以下の二点を活動の軸とします。

一・継続的に活動できる仕組みの確立

前述の通り、私はこれまでに生命科学部自治会の委員長として組織の立て直しと持

続可能な運営体制の構築に取り組みました。また、全学自治会では外部の立場から各学部自治会の活動を支援し、活動基盤を支えてきました。その中で、前年度は活発に活動していた自治会が世代交代に伴い活動が停滞する様子が散見されました。こうした経験を通じて、優れたリーダーが一時的に組織を立て直しても、適切な引き継ぎや育成が伴わなければ、数年後には活動が再び停滞してしまうことを痛感しました。このような現状に対して、自治会に限らず全てのパートが「一年限りの活動」で終わらず、次世代へとつながるような仕組みを整えます。

〈具体的な施策〉

年度頭から「引き継ぎ」を意識した活動計画の策定を促すとともに、引き継ぐべき情報の精査やノウハウのサンプル提供等、各パートの継続性を担保する支援体制を構築します。その上で、積極的なコミュニケーションによって、困難に直面した際に最初に相談できる「伴走者」となり、各パートに寄り添うことで継続的に活動できる団体作りを下支えします。

二、組織間の「繋がり」の強化

①パート間の繋がり

中央パートの各団体は、それぞれが重要な役割を担っていますが、活動が個々に閉ざされているためパート毎に孤立感を抱える場面も少なくありません。また、各学部自治会や課外三本部においてはそれぞれパート間の活動の方向性は類似しているものの、一部の人人が団体を動かすという状況が多くみられ、やはり役員や委員が孤立感

を抱えている場面が見られます。このような状況に対して、各パートが個別に活動する中で生じがちな孤立感を解消し、相互に高め合える環境を整備します。

②各パートと中央常任委員会との繋がり

中央常任委員会の方針や中央常任委員会から各パートへの依頼について、単に指示を下ろすのではなく、その「背景」や「意図」を明確に伝える場を設けます。これによつて「共に動く」関係を築き、中央パートとしての一体感を醸成し、学友会全体が円滑に機能する基盤を固めます。

〈具体的な施策〉

今年度に引き続き、各パートが抱える課題や懸念事項を共有できる場を設けます。

この場において、①で示したように、単なる共有にとどまらず、他パートの成功事例を用いた改善策の提示や、担当者同士が直接連絡を取れるようにする仲介役を担うことで、効果的に課題解決すると同時に、パート間の繋がりを支援します。同時に、②で示した事項を組み込み、共に動く関係を築きます。

また、今年度横浜市立大学との交流会にて行つたように、中央パート内での研修等においても各パートの抱える課題を論点に議論できる場を積極的に設けます。

【私自身の強み】

中央常任副委員長として活動するにあたつての私の強みは以下の二点です。

一・中央常任委員長補佐での経験

私は上記の通り、今年度中央常任委員長補佐として活動してきました。その中で、来年度中央常任委員会役員の一員として活動する上で不可欠な知見を得ることができましたと考えております。具体例を以下に示します。

①課題認識

来年度は公開全学協議会があり、学園共創活動を踏まえた大学と学友会との双方の関わり方がより一層重要になります。しかし、学園共創活動はこれが完成形ではなく、より具体的に検討していくなければならない段階にあると考えております。

また、コロナ禍以前の情報の欠如によつて組織体制を遡ることが困難であり、現在の組織がどのような経緯で作られてきたのか等が不明であることも現在の中央パートの課題として挙げられます。さらに、課外活動支援が部分的に不十分であることも課題の一つだと感じております。これらのように、現在の学友会や中央パートが抱えている具体的な課題を把握しており、中央常任役員の一員として議論を提起する役割を担うことができます。

②議論においての観点・視点

中央常任委員会やミーティングでの議論を見てきたことで、議論をする上で重要な観点・視点を理解しております。具体的には、規約・規程に対する解釈を一致させた上で、議論の必要性や、先々のトラブルを想像してリスクヘッジを行う必要性が挙げられます。これを理解していることによつて、中央常任委員会内での議論において足りない視点を補う立場に回ることができると考えます。

③年間スケジュールの把握

各研修や全学議論、全学行事といったスケジュール感を把握しております。それによつて、早い段階で動き始める支えになれるだけでなく、どの時期にどのようなトラブルが起ころる可能性があるかを想像できることによつて中央常任委員会内のキヤパシティの管理ができると考へております。来年度は公開全学協議会も実施されるため、例年よりも一層キヤパシティの管理が求められると考えられます。

④規約・規程の脆さの把握

今年度は、様々な規約や規程の改正が行われている年であると考えます。これらの改正は、これまでの学友会の歴史の中で少しづつ生じてきたズレによる不整合を解消することが目的の大半だったと認識しております。学友会は約四年で入れ替わる学生によって構成されているため、時間の経過によつて規約の穴が生じることは一定仕方がないことであると感じています。そのため、穴が見つかった際の迅速な対応が求められます。規約の脆さを理解しているからこそ、私自身がその対応ができると考えます。

同時に、穴を作らないような強固な規約を作成することは不可欠です。強固な規約は、組織の在り方を後世に伝える最適な手段にもなるため重要であると認識しております。これまでの学友会での活動の中で複数回規約改正に携わってきた経験から、強固な規約を作る支えになれると考えます。

⑤研修に関する事項の把握

研修を行うまでの過程を間近で見てきたことで、実施までの進め方や日程感を把握しております。また、中央パート全員を対象とするからこそ、対象者が参加しやすい

実施日時を調整する等、様々な難しさを感じました。また、ディスカッションを間に挟むコンテンツ形式を取ることによって集中力が切れないような工夫は、来年度以降も引き継ぐべき事項だと認識しています。

中央パーティリーダーズキャンプ等の例年行われている研修は、実施すること 자체を目的としてしまい本来の目的を見失いかねません。しかし、研修を行うことによって得てほしいことを目的として先に定めることが重要です。この重要性を理解していることによって、目的を持った研修へ導くことができると考えます。

これらの知見を活かし、中央常任委員会の一員として、中央常任委員会が実効性を持つた活動を行う支えになれると自負しております。

二・堀次期中央常任委員長との方向性の一致

中央常任副委員長は中央常任委員長を補佐する役割であり、同じ方向を向いて活動することが求められます。堀次期中央常任委員長は、中央常任副委員長に求める役割として、質疑応答の中で「所信表明で掲げていることは業務量が多く一人では実行できないため、議論しながら共に進めていきたい」と述べており、堀氏の考える学友会活動における課題を改善する一翼を担うことが中央常任副委員長に求められると考えております。

堀氏が所信表明にて基本方針として掲げている「人とのつながりを基盤とした、学生のニーズに合わせた組織体制の構築」は私自身の方向性と一致しております。私の

方向性が堀氏の示す二つの戦略にどのように一致するかを以下に示します。

①仲間との繋がりを創り、自己実現ができる環境作り

この戦略を中央パート内で推進するという点において、私の方向性と一致していると考えます。パート間の繋がりを強化する役割を私が担うことによって、パート内外を問わず同じ目標を持つ人との繋がりを作れる環境が整い、この戦略が達成されると考えます。

②学友会活動の基盤維持とポテンシャルの発揮

基盤維持という点において私の方向性と一致すると考えます。過去の積み上げが失われないためにも、各パートの活動の基盤を整えることが必要であり、私の掲げている「継続的に活動できる仕組みの確立」がこれに貢献すると考えます。

上記の通り方向性が一致していることに加え、共に問題解決に取り組んだ経験からも、同じ方向性を向いて活動できると考えております。

【最後に】

中央常任副委員長は、学友会則第十二条の二において定められている通り、中央常任委員長を補佐する役割を担っています。私はこれを、単なる補佐ではなく「中央パートを下支えする役割」という広い意味で捉えています。各パートが自らの強みを活かして活動できる環境を整え、中央常任委員会としての方針が各パートに浸透させる橋渡しとなる。このような形で、学友会全体を支える存在になります。

これまでの経験で培った「支える力」と「仕組みを作る力」を活かし、次世代へ続く中央パートひいては学友会の基盤づくりに尽力することを約束いたします。

簡潔ではありますが、以上を私の所信表明とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

次のページより三人目の候補者による所信表明を掲載しています。

併せてご確認ください。

中央常任副委員長候補③

文学部 三回生

乾 岳人（いぬい がくと）

一、はじめに

この度二〇二六（令和八）年度立命館大学学友会中央常任副委員長選挙に立候補いたしました、文学部三回生の乾岳人と申します。本所信表明では、これまでの私の活動内容と共に、二〇二六年度の私の中央常任副委員長としての活動の方針について述べることとします。

二、これまでの活動

・文学部自治会での活動

一回生の春、入学後約一週間で文学部自治会の執行委員となり、様々な今へと繋がる機会を得ました。執行委員になり約一ヶ月後、全学協議会代表者会議が行われ、そこで「要求実現運動」から「学園共創活動」へ転換することが表明されました。サテライトで傍聴していた私は知識量から“なんとなく”見て いるだけになってしまいましたが、今思えば、その場に立ち会えたことは幸運であったと感じます。自治会としての業務では、自治会が行っている備品貸し出しの規約改正や充電器貸し出しに伴う規約作成が、私が執行委員になり初めて主体的に取り組んだ業務であり、規約作成

のいろはを学びました。また、学生大会からの五者懇談会では、アンケート分析の方法から議案書作成、そしてどういった議論をし、発言をするのか、大学と議論することやその過程について必要なことを学びました。他、文学部ゼミナール大会の運営をはじめ、諸先輩方と主体的に関わることが、今の私に繋がっていると感じています。

二回生では委員長を務め、文学部生の代表として団体を率いていく立場になりました。委員長としては、冷え切っていたオリター団との関係性の再構築を小西前委員長（当時）から引き継ぎ発展させるべく、オリター団の研修に積極的に参加し、また、サブゼミの時間に執行委員会として用意した自治会説明の動画を流してもらえるように依頼するなど、学生と自治会が「知り合い」の関係になれるよう工夫をしました。

学生大会での議案書の否決という前代未聞の事態も起きましたが、文学部生の意見や考えが大学に伝わらないという事態を回避すべく、全学自治会をはじめ関係各所と協議を重ね、最終的に意見交換会の形で伝えることが出来たのは、ひとえに関係される方々のおかげであると痛感しました。三回生では副委員長として自治会を支える立場になりました。また、支えつつ、昨年度からのオリター団との関係性改善や自治会の存在を知つてもらうための施策推進等を行いました。そして、前年度開けなかつた五者懇談会も、学生大会での議決を得、開くことが出来ました。学部生約500人ほどの総意として議案書を元に議論をすることの必要性や大切さを学んだこれらの経験は、今後も活かされると確信しています。

- ・調査企画部での活動

一回生の夏、私自身の興味関心と文学部自治会の諸先輩方（高木副委員長、中村会計部長、いすれも当時）の助言もあり、調査企画部に入りました。自治会とは全く異なる規模と業務内容ではじめは戸惑い、不安にもなりましたが、諸先輩方の手引もあり、徐々に慣れていきました。新規登録団体審査や継続審査では、団体を如何に公正に見るか、また、支援していくか等を学びました。また、私が新規登録団体審査に携わった団体が登録団体になり、学園祭等に出展し活動している姿を見ると、あたかも母親になつたかのような感覚になり、支援していくことの面白さや難しさを感じました。一回生から担当した業務の一つが、登録情報変更届の適用や一斉配信業務でした。学友会中央パートからの支援に不可欠な情報に携わることは責任を感じると共に、調査企画部の担つている恒常的な業務の重さ・重要性を痛感しました。二回生の途中からは次長となり、段々と責任が増えていくのと共に団体に対する知識や視点が増え、今に繋がる土台が形成されていきました。三回生の現在は部長として部を引っ張っていく立場につきました。私は活動の方針として、「課外自主活動団体との接点の増加」、「学友会所属団体の在り方の検討と改革」、「各種審査の実施」、「広報機会の提供と創出」の四点を掲げました。二月早々に、継続審査において必要と認められた団体に対して二〇二三年度ぶりに是正勧告書を発行し、安定し責任ある団体運営を促すと共に団体との接点を増やしました。勧告書を発行せざるを得ない団体が多くあると云うことに危機感を覚えると共に、どういった支援をしていくべきなのか考える契機の一つとなりました。学友会所属団体の在り方の検討と改革については、春頃に部

として議論の俎上にのせ、改革案の起草に着手をしましたが、部内情勢の不安定性や一部署として起草と実行に移すことの限界があり、現在は凍結状態にあります。しかし、必要性は痛感しております、また、堀次期中央常任委員長の所信表明にもあつた通り、在り方の検討や抜本的な改革は行わなければならないことであると考えております。

それ故に、これについては後ほど述べることとします。各種審査については、二〇二四年度春季新規登録団体審査以来、一年ぶりに新規登録団体審査を実施しました。半年間実施されないだけで例年の倍以上の団体様からの応募があり、審査の必要性を実感しました。秋審査は例年通りになりましたが、必要性や重要性に関する認識に変化はありません。そして、現在継続審査を実施しております。広報機会の提供と創出については、先ず、衣笠学生会館設置の掲示板の一角に「学友会からのお知らせ」コロナを設けました。近年はホームページ等デジタルに頼りがちであった「学友会」からの広報を衣笠キャンパスだけにはなりますがアナログでも実施し、更なる周知を図りました。次に、調査企画部として、サイネージの妥当性についての検討を実施しました。衣笠キャンパスの配置場所は適切か、他キャンパスに設置する必要は無いか等です。現在、衣笠キャンパス設置のサイネージは稼働状況等を鑑みて移設する準備を進めております。また、他キャンパスについても増設出来るよう協議と調整を進めています。他、学生会館に係る問題、共同倉庫のこと、ロッカー増設や学生会館使用規約改正など、これまで見向きもされなかつた、しかしながらやらなければならぬこと、くさいものとして蓋をされていたがやらなければならぬことに取り組んで参りました。調査企画部での業務は、今の私を大きく形作り、また、後述する中央常任

副委員長としての活動方針に大きく影響を与えました。

- ・全体に係る活動

全体に係る活動としては、一回生として入学後しばらくして開催された二〇二三年度第九回中央委員会以降の中央委員会にはオブザーバー含めて全て出席し、また、各種懇談会や全学協議会代表者会議も可能な限りで出席し、可能なときは発言もし、施策を見、積極的に参画して参りました。昨年度と今年度は活動基盤支援金・保障費の検討委員の一員として狭義の「学友会」課外活動とお金について積極的に考え方、また昨年度は中央パートリーダーズキャンプの運営チームの一員となり、研修について知り学ぶ機会を得ました。新歓や学園祭の対外協力や会計監査委員会にも毎回参加しています。他、学部に限りますが、今年度は文学部長選挙拒否投票管理委員会にも所属し業務に参画しました。自治会、課外等と分類不可能な活動にも積極的に参加し、知見を蓄え経験を積み重ね、今に繋げてきました。

三・立候補に至った経緯

ここまで述べた通り、私は中央パートで様々な経験を積み重ね、成長に努めて参りました。またこれは、来年度の成長を妨げるものではありません。そして、これらの経験や知見によって、課外支援や議論する立場を中心に様々な視点から物事を見るこ

とが出来ると考えています。このような私が、これまでの経験や視座を活かし、学生に、組織に、寄与・貢献出来る立場は何かと考えた際、最終的な解が、今回立候補した中央常任副委員長の立場であります。後述しますが、私は中央常任副委員長として、その立場を以て、柔軟に、臨機応変に動き、広く学生に尽くしたいと考えております。

四 中央常任副委員長としての活動方針

・団体と「学友会」を繋ぐ

現在、学友会所属団体は公認団体、同好会、任意団体、登録団体の四つの区分のもと、中央パートも含めると約三四〇団体あります。それぞれが、様々な場所で個性を活かして活動しています。そして、各本部が登録団体以外を所轄し、調査企画部が登録団体に目を向けながら、全体に係る事項を担当しています。私は各種審査（新規登録団体審査、継続審査）やヒアリングの場で既存の団体や新たに所属団体になりたい団体と関わるなかで、団体の「力」を感じきました。その力というのを具体的にすると、実績として表れる力や学園祭等であらわれる力、団体様の問題意識や現状に対する疑問や不満といった力です。私は、それらの力が、思いが、考えが、「学友会」に届いているか、届ききつているか、また、それらが存分に活かされているかといわると、活かされていない、活かしきれていないと考えています。来年度は原則として四年に一度開催される全学協議会があります。私はそれに向けて、代や情勢、また、

構成員数によって活動の幅や支援の幅に差が出てきてしまう各課外本部や調査企画部という所轄の垣根を取り払い、「伝統」とも言える団体固有の考え方や想い等を吸い上げくみ取り、議論に活かしていく様に行動したいと考えております。具体的には、能動的に団体と関わり、コンスタントに意見を聞く機会を設けたり、団体の実際・実状・現状の把握につとめたりし、既存部署、特に課外本部や調査企画部が現状として追い切れていたり実際の行動に起こしづらかったりする部分を担っていくないと考えております。また、立命館大学は「R2030」にむけて、正課と課外の両立を掲げ、充実した学生生活が送れる大学を目指しています。学園共創活動を標榜して初めての全学協議会に向けて、「学友会」と団体を繋ぎ、意見を集約する役割を担つて参りたいと考えております。

- ・「学友会」からの支援を強固にする

「学友会」からの支援と聞くと、多くの人は対象は学友会所属団体を想起なさるかもしれません。たしかに、学友会所属団体は支援対象のひとつとしては間違つてはいません。しかし、私はそれに加えて、学友会所属団体と同じ課外自主活動団体である、自治会をはじめとする中央パートも支援対象となると考えます。そして、先に述べたように課外活動の重要性が改めて声高に言われる今こそ、その支援を強固にする必要があると考えます。

そこで、私は”支援”について検討出来る体制や組織体を構築し、最終的には、実

行に移せるようにしていきたいと考えております。現在、課外活動の支援について検討する場が設けられているかと云いますと、判断に窮する状態にあると考えております。例えば、中央事務局では三部三室と課外三本部での会議を毎月実施していますが、時間や回数、出席者の都合から、双方の連絡会のようになることもあります。個別具体的な施策の討議や支援の枠組みでの議論が出来ているとは言えません。また、仮に議題として提起されたとしても、十分なものになるとは確証をもっては言えません。他に、学生会館運営員会と云う、学生会館に係る事項を議論共有する会議体もありますが、あくまでも学生会館に係る事項であり、全体の支援の議論をする場ではありません。そこで、私は”支援”について、議論し、共有し、行動し、学生や団体と良い関係を築けるような場を設けたいと考えました。行動については未知数ではありますが、例えば、課外三本部と調査企画部、時に全学自治会、そしてファシリテーターとしてや伴走者としての常任副委員長を含めた支援に関する会議を組織し、本部の個性や伝統を尊重しながらも、「支援していく」という共通項でくくられた存在として今後の策について検討し実行していく会議体を組織することは重要なことだと考えます。また、この会議体は中央事務局主催の会議とは異なり、直接団体様と関わり、支援していくパートしか関わっていません。井の中の蛙大海を知らずとは云いますが、その後、されど空の青さを知るとも云います。時にはミクロな視点での検討も必要となるでしょう。他、場合によれば、課外三本部と調査企画部、そして、中央常任委員会で支援について検討する場も必要となると考えます。調査企画部長として課外支援に携わる際にネットとなつたのはあくまでも調査企画部は中央事務局の一部署でしか無

く、業務分掌の一環に甘んじてしまう、また、組織として行っていく組織性から、団体毎やキャンパス毎と云つた個別具体的な課題や個人の問題意識を起点とする事象には関わりにくいということでした。そういうたた状態を打破すべく、実行性を高めていくべく、マクロな視点を加えるべく、施策決定に大きく関わり、専門性の高い集団である中央常任委員会と直接座を交えることや、専門集団としての討議と実行が必要になると考えます。

- ・課外活動の在り方を検討する

調査企画部での項目でも述べましたが、私は学友会所属団体の在り方の検討は必須であると考えております。また、これは、先に行われました中央常任委員長選挙で堀候補が所信表明のなかで述べていたほか、学生部との懇談会の場で「課外活動の再定義」として問題提起されたものも延長線上にあるものあると認識しております。そもそも、現在の狭義の「学友会」の課外活動は、所属団体規程に規定される公認団体・同好会・任意団体・登録団体の四区分と所謂「中央パート」があります。また、中央事務局調査企画部が所轄をする登録団体は、今後、学芸総部本部・学術本部・体育会本部の「課外三本部」に昇格する団体であり、また、前提として各本部の所属に足る活動をしているものであります。しかし、私の問題意識として、その前提が「課外活動」が多様化するなかで、その前提や存在、支援方法や受け入れる「中央パート」の体勢が情勢に伴つているのかというものがあります。本問題意識

については先の選挙において堀次期中央常任委員長が所信表明や当日の答弁のなかで問題意識として取り上げられていたものもあります。今年度の春、私が中心となり学友会所属団体の在り方や団体区分の妥当性について検討する会を内部で設けました。最終的には、中央事務局の一部署で行うには、事務実務機関であることを第一義として活動する組織として具現化して行くには、組織としての限界があり、また、調査企画部が急激な成長期にあったこともあり、議論を凍結せざるを得ない状態となりました。そこで、二〇一六年度は中央事務局調査企画部以上の、中央常任委員会が中心となり、組織の垣根が越えやすい機関を以て課外活動の在り方、学友会所属団体の在り方、また、支援についてを検討し議論し、具体的なものにしていくべきであると考えられます。そこで私はこれまでの経験や二〇一五年度の議論の知見をもとに、議論を進め、課外活動の発展や支援を議論し、進め、検討だけでは終わらないようにしていきたいと考えております。

- ・中央常任委員会の一員として

中央常任副委員長が組織体・会議体としての中央常任委員会を構成する一員であることは認識しており、また、先に述べてきたような主に課外に関する業務に徹することが出来ないことがあると云うことも先達の業務を見ているなかで重ねて認識しております。例年であれば、各種懇談会の業務や定期的な会議、学友会中央パートでの研修等、そして殊に二〇一六年度は公開全学協議会があり、また、総長選挙も控えて

います。私は先に述べたように、これまで主に自治会系、課外支援系の業務を担当し、知識と経験を蓄えてきました。そして、特に今年度は業務は山積していましたが、時に優先順位をつけ、また時に担当者を振り分け、業務を遂行して参りました。中央常任副委員長になった暁には、中央常任委員長を補佐し、「学友会」の施策推進に励んで参ります。また、各種施策推進と共に、優先順位をつけ、時に個人や部署と連携を図り、円滑な組織運営と施策実行に寄与出来るようにします。そして、何かしらの業務が与えられた場合は、中央常任副委員長として業務を遂行すると共に担当者と共に折衝を重ね、確実に履行出来るようにします。これまでの経験を中央常任委員会に還元し、最終的には立命館大学学友会全構成員、則ち、立命館大学に籍を置く学生全員に還元し、寄与出来るよう、励む所存です。

五、最後に

これまでの三年間、私は様々なことに向き合い、能動的に取り組み、経験を重ねてきました。成長実感を伴う課外活動としてこれ以上無いものとも思っています。学部生としての基本的な最終回生である四回生を迎える二〇二六年度。これまでの経験を還元し、持続可能なものにするために尽力したいと考えています。「学友会」という組織が、課外活動が、学友会所属団体が、また、その支援と施策が、今後も続いているためには常に持続的な進化をしていかなくてはなりません。私は中央常任副委員長として、進化を時に支え時に導く、比較的自在に動ける存在として、粉骨碎身組織に

尽くし、懸命な努力を積んでいく所存であります。そしてここに皆様のご支援を賜りたく存じます。末筆ながら、ここまでお読み頂いたことに深い謝意を表します。

次のページより四人目の候補者による所信表明を掲載しています。

併せてご確認ください。

中央常任副委員長候補④

グローバル教養学部 三回生

伍 可非（く かひ）

1. はじめに

この度、2026 年度中央常任副委員長に立候補させていただきました、グローバル教養学部 3 回生の伍可非と申します。グローバル教養学部において、哲學、社会学、歴史、政治、デザイン、プログラミング、SDG、物理学などをはじめ、幅広い知識を学んでおります。今学期の授業では、「A comparative analysis on the difference of memory and responsibility indication by terminology between Kyoto Museum for World Peace and Kaiten Memorial Museum: The different way to describe deceased people in World War II（仮和訳、立命館大学国際平和・ヨーロッパ・回天記念館における記憶と責任の表現に関する用語の比較分析：第二次世界大戦における戦没者に関する記述方法の違い）」をテーマとして研究しております。また、4 回生から始まるセミナー研究で、会社の AI 導入における個人情報の取り扱いの論理について研究するなどを予定しており、それに向けて知識の蓄積など、準備を進めております。正課以外も学内の SEEDS プロジェクトや授業の補助スタッフ、学部事務室の補助スタッフを経験しており、多種多様な活動に携わってまいりました。

学友会中央パートでの活動は、2024 年 6 月からグローバル教養学部自治会に所属し、同時に会計を務めました。同年 11 月から中央事務局グローバル化推進室に入室し、学友会の国際化推進に努めました。2025 年 6 月からグローバル教養学部

自治会委員長として活動し、同学部自治会オリター団の再構築や各懇談会において学部の声を発信するなどを行つてきました。また、同年度で学園祭実行委員長補佐を務め、各祭典の D&I 推進に力を尽くしております。本所信表明では、これまでの活動の振り返り、立候補に至つた経緯、および来年度の活動の方向性について記述をいたします。

2. これまでの学友会活動の振り返り

2.1. グローバル教養学部自治会での活動

私は、本学に入学して半年経つた1回生の2学期目からグローバル教養学部自治会に在籍し、1年目は会計として活動させていただきました。会計になつたきっかけは、当時の委員長から相談を受け、日本語が堪能である人がいなかつた中で、会計業務を引き継げる人として所属を決めました。私が会計になつた当时、グローバル教養学部自治会では、完全な引き継ぎ体制がなく、それに加えて原則3回生の全員がオーストラリアに留学する必要があり、団体の年度替わりにおける引き継ぎはほとんどない状態でした。また、団体内の研修制度がなく、グローバル教養学部自治会が学友会中央パートにおける立場や組織内の構成など、必要な知識を知らない今まで活動していました。そこから、私は中央委員会の参加や各懇談会の参加を重ね、他学部自治会とのコミュニケーションと学友会中央パートに関する知識の蓄積を図りました。

当時の他学部自治会は、五者懇談会や運動会をはじめとするオリター団が主催するイベントの開催に向けて準備を進めていたと聞き、自学部自治会との格差を初めて認

識しました。それを解消するために、何度も全学自治会や学部事務室、学生オフィスと相談し、これまでグローバル教養学部自治会が歩んできた道を発掘し、振り返ってみました。しかし、自学部自治会内の引き継ぎがない以上、他団体からのサポートも限定期になってしまいます。それらの経験を通して、団体内での引き継ぎの重要性を痛感いたしました。

1年目の活動経験を踏まえ、2年目の活動目標として、学生の関心の持ちやすい、また多様な学生が活動しやすい自治会創りや安定な引き継ぎ体制の作成を年間方針に掲げさせていただきました。これまでグローバル教養学部およびそのオリター団が行ってきた事業を引き継ぎながら、学生は自分自身の関心に合わせた活動ができるよう事業を整理いたしました。具体的に、組織構成員を規約通りおよび事業内容に基づきグループ分けをし、学生自身の関心に合わせて各グループに入るよう組織構成を見直しました。また、グローバル教養学部は英語基準学部であり、構成員の一部しか日本語が堪能ではない特徴を踏まえ、団体の対外交流専門のチームを作り上げました。それにより、団体内で完結できる活動であれば、日本語が一切できなくても参加・参画できるようになりました。それらの取り組みに加え、InstagramなどのSNSや学内掲示板、G-Houseでのポスター掲載を通して、新たに17名の新規構成員加入了だきました。

2年度目の活動の中で、特に安定した引き継ぎ体制の策定に力を注ぎました。まず、作成された書類が三役や執行部の中で誰でも閲覧できるように、クラウド上に保存するように徹底しました。また、新規加入した構成員が速やかに学友会中央パートの活

動を理解できるよう、研修会の開催をいたしました。これからは、来年度への引き継ぎを見据えて、新たにマニュアルの作成を取り組んでいきます。

このように、多様な学生が受け入れられるような構成や安定な引き継ぎ体制は、次の世代が活躍のスタートにあたり大きな助けになると考えております。私としては、グローバル教養学部自治会がこれまでの取り組みを踏襲しつつも体制を適宜見直しながらも継続する組織になるよう期待をしております。

2.2. グローバル化推進室での活動

私は、2回生の1学期目から、学友会における一言語化業務を中心に活動しているグローバル化推進室に在籍し、学友会中央パート全体の一言語化に携わってきました。具体的な業務内容としては、全学行事、中央事務局の広報物、中央パート各団体の規約、サークルコレクションなどを一言語化し、日本語が堪能ではない学生であっても理解できるような文書を作成いたしました。これらの活動は、ほとんど費用がかからぬにも関わらず、学友会員である英語基準学生などに対する有効な還元活動です。その中で特に、全学行事における一言語化は、英語の文書などを見る人が少ないものの、多様性のある学生の全員を受け入れるための第一歩であると認識しております。しかし、現在に至っても課題が残っていると考えております。サークルコレクションの一言語化は、2022年度から始まってから日本語版と同時に発行するのが一般的でしたが、2025年度では業務の都合上、春での発行を実現できませんでした。それにより、英語基準学部や学科から情報の不足についてご意見を受けまして、秋新歓に

間に合うよう英語版の作成に努めました。このように、グローバル化推進室での活動は、試行錯誤や経験を重ねが不可欠であり、今後の活動においても困難を克服し、結果が出せるように努めてまいります。

2.3. 学園祭実行委員会での活動

私は2025年度の学園祭実行委員会において、D&I推進を目的とし、グローバル化推進室との提携を円滑化にする役割を担っております。具体的な業務としましては、事前準備の段階では当日パンフレットや総合パンフレット、掲示物、出店申請の説明書類などの英訳に携わっており、祭典当日ではD&I本部の運営に努めています。事前準備で特に感じたのは、キャンパスマップなどの英訳データが、年度によって変わることがほとんどないにも関わらず、引き継ぎがありませんでした。そのため、改めて英訳データの作成が必要でした。このように、準備業務の効率化に課題を感じております。また、当日の運営については、より多くの方に楽しんでいただけるよう、様々な取り組みを実施してきました。しかし、D&I本部という文言を来場者に案内することにより、その本人が特別な対応をされた気持ちになりかねず、手伝いを尋ねることを控える場合も考えられます。それらの課題は、次世代に引き継いだ上で、解決に向けて取り組んでいくことを望んでおります。

3. 立候補に至るまでの経緯

このように、私は今までの学友会活動において、多様性推進の専門性を持ちつつも、

多種多様な領域で様々な経験を積んできました。多様性の推進は、单一の部署で完結するものではなく、全学友会が関わる将来の課題であると認識しております。これにより、私の強みとしては、多様な視点から学友会を見ることによる課題の洞察力と、それらの課題解決に向けて実務を進める能力であると考えております。これらを踏まえ、4回生として学友会での活動を考えた結果、学友会費の還元を全学友会員に及ぼせるように努めたく、中央常任副委員長の立候補に至りました。

4. 来年度の活動の方向性

4.1. 常任委員会に新たな視点の提供

これまで決まってきた次期常任役員の所信表明で示した来年度の方向性に則つて活動しつつ、私のこれまでの活動を通して得た視点を導入することによって、常任委員会として学生に提供するものの質を向上させたいと考えております。次期常任役員が掲げた方針や年間を通してやらなければならないことに対しても欠けていた視点を提供し、それらの施策を迅速かつ正確に実施することを努めていきたいと考えております。具体的な例として、私はこれまでの活動の中で出会った学生の中で、学友会活動に関心を持つているにも関わらず、言語や所属キャンパスなどの都合で活動しないことを選んだ人が多々見受けおります。それを改善すべく、堀次期中央常任委員長と渡邊次期中央事務局長が掲げた施策である人材の確保と育成に対し、確保する段階でのわかりやすい説明と育成段階の有効な指導を通じ、中央パートを学生が言語力や所属キャンパスに制限されず自分自身の能力を発揮できるような場に変え

るよう、グローバル教養学部自治会で積んできた多様な背景を持つ学生が共に活動してきた経験から新たな視点を提供できると考えております。

4.2. 学友会中央パートにおけるDE&Iの推進

これまで述べたように、学友会中央パートの活動に関して、DE&Iをさらに推進したいと考えております。現在では、中央パートにおけるDE&I推進は全学行事の企画、およびグローバル化推進室の一言語化取り組みだけに留まっています。そこで、次期中央常任委員長の方針として掲げているように、積極的な学生とのコミュニケーションや実務者の獲得を推進するよう、国籍や言語力のみならず、性別、性的指向、信条、社会的関係などが関係なく、学生がご自身の意見が表明できる、またご自身の強みを活かして中央パート構成員として活動できるような環境を築いていきたいと考えております。

具体的な施策としては、まず、中央パートリーダーズキャンプなどの場を活用し、参加者がDE&Iへの理解を深められる研修内容を取り入れたいと考えております。現在の中央パートリーダーズキャンプをはじめとする各研修では、学友会中央パートでの活動に必要な前提知識が豊かな一方、多様な学生の受け入れや公平性の維持についての内容が少ないと考えており、それを解消したい所存です。また、公平性を保つため、必要に応じて学生の意見発信や活動をサポートしていくたいと考えております。中央パート活動で用いる用語や文書は、複雑なものや長いものが多く、すべてを理解し切れるまでは非常に時間がかかると考えております。特に新規実務者に向けての説

明は、よりやさしいかつ簡潔な説明を行い、学友会中央パート活動により関心をもちやすくするよう努めたいと存じます。なお、これらの施策を全て実施すると、個人や中央パートの業務に多大な負担をかけてしまう可能性があるため、安全性を確保した上で AI などのツールを活用し、その業務を分担していきたいと考えております。

4.3. 中央パート団体の引き継ぎのサポート

先述した通り、私はグローバル教養学部自治会にて引き継ぎの重要性を痛感し、その団体の引き継ぎ体制を構築した過去があります。そのため、団体の引き継ぎ体制を継続してサポートしていきたいと考えております。具体的な施策としては、2025 年度川崎中央常任副委員長が掲げた「情報管理や引き継ぎの体制の標準化」を受け継ぎ、2026 年度も引き続き団体の引き継ぎ体制の提案と相談できる場を設けていきたいと考えております。また、私としてさらに推進したいことは、マニュアルなどの書類を整備し、団体内で大きな人事変動があつたとしても、活動の根拠や手順が明確に残る仕組みを整えることです。特に、新しくできた中央パート団体の事業のマニュアル化を支援し、団体の状況変化に応じて適宜見直せるような制度を構築していきたいと考えております。なお、マニュアルはあくまでも年度によって変わらない活動の参考となるものであり、団体活動においては強制力を持たず、新規事業の妨げとならないよう、十分に配慮して整備してまいります。

5. おわりに

私は、これまでの2年半、学友会内外で様々なことに取り組んできました。その中で、私の活動にご支援くださった中央パート構成員の方々、それ以外の学友会員と教職員に、改めて御礼を申し上げます。これまでの活動を通して積んできた経験と培つてきた視点は、入学当初考えもしなかった成長の実であると感じております。今後の学友会では、次期中央常任委員長が掲げた方針である「人とのつながりを基盤とした、学生のニーズに合わせた組織体制の構築」を基軸とし、私ならではの視点やサポートを提供し、学友会の更なる発展や活動の高度化に寄与します。中央常任副委員長になつた際、本所信表明に記載しているものを含め、中央パートをより良いものに、皆様と共に取り組み、学友会の未来への一歩を築いていく所存です。

以上が、私が中央常任副委員長に立候補するにあたつての所信表明です。最後まで目を通してくださいありがとうございました。どうぞよろしくお願ひいたします。

投票日 二〇一五年一二月二〇日

二〇一五年度立命館大学学友会中央選挙管理委員会